

COLUMN

「Zero Wasting」めざす東京 2020の資源管理戦略

ジャーナリスト・環境カウンセラー

崎田 裕子

SAKITA YUKO

1974年、立教大学社会学部卒業。出版社で11年間雑誌編集者を務めた後、フリージャーナリストに。生活者・地域の視点で環境問題、特に「持続可能な循環型社会づくり」を中心テーマに取組む。早稲田大学招聘研究員。環境省登録の環境カウンセラーとして、環境学習やまちづくりに関わる。NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット前理事長、NPO法人新宿環境活動ネット代表理事。環境省「中央環境審議会」、経済産業省「総合資源エネルギー調査会」委員、東京2020大会組織委員会「街づくり・持続可能性委員会」委員など。全国おいしい食べきり運動ネットワーク協議会会長。



仕切り直して7月23日に開幕する東京2020大会。執筆中も新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が延長されているが、環境・経済・社会への負荷を極力抑えた持続可能な大会めざし、多くの関係者が準備を進めてきた、その一端を紹介したい。

大会は世界最大級のスポーツイベントとして、SDGsに貢献することを掲げてきた。組織委員会は2015年に外部専門家の「街づくり・持続可能性委員会」を設置。その基に開かれた詳細検討の場で主要テーマの大目標や具体策を明確にし、「持続可能性に配慮した運営計画第一版、第二版、進捗状況報告書、大会前報告書、追補版」などで公開してきた。

私もNPO持続可能な社会をつくる元気ネット理事長（昨年より前理事長）として参画してきたが、主要テーマは「気候変動」「資源管理」「大気・水・緑・生物多様性等」「人権・労働、公正な事業慣行等」「参加・協働、情報発信（エンゲージメント）」の5分野と「持続可能な調達」となる。

特に「資源管理」を詳述すると、大目標は「Zero Wasting」。気候変動の大目標「Toward Zero Carbon」にも関係するが、廃棄物ゼロをめざす10の目標は、3Rと持続可能な資源利用を重視。

「食品ロス削減、容器包装等削減、調達物品のレンタル等活用、調達物品の再使用・再生利用99%、再生材の利用、入賞メダルの再生金属利用100%、運営時廃棄物の再使用・再生利用65%、食品廃棄物の再生利用、建設廃棄物の再使用・再生利用、そして木材等の持続可能な利用」である。

数値目標を設定したのは3項目。金銀銅メダル約5000個を再生金属100%でつくる「都市鉱山メダルプロジェクト」は、多くの方々の協力で実現した。全国の小型家電リサイクル認定事業者や携帯企業、環境省、東京都等が連携して推進し、9割を超える自治体や携帯企業店頭など計2万カ所を超える拠点で、市民が持ち寄る使用済み携帯や小型家電の回収を実施。2017年から2年間で、必要量「金32kg、銀3,500kg、銅2,200kg」を集めた。

「調達物品の再使用・再生利用99%」目標は高いハードルだが、期間限定イベントとして当然の配慮。組織委員会は「後利用・再資源化ガイドライン」（方針編・実施手順編）を策定。調達、使用・管理、撤去の各段階の配慮事項と判断基準、対象調達物品を明確化し、廃棄処分は1%以下に抑える流れを構築した。

「運営時廃棄物のリサイクル率65%以上」は、選手村や会場では資源分別に協力してもらい、脱使い捨てプラスチックとして活用する紙皿・紙コップもすべて衛生紙に再生する。観客にペットボトルで提供する飲料は、すべてボトルtoボトルリサイクルを目指すなど、最新技術を活用する。

なお、大会では産業廃棄物と事業系一般廃棄物の一体化管理をめざし、運営時廃棄物の資源化と処理実績の管理に、電子マネーを活用する。

前回1964年には、大会を契機に高速道路など都市インフラの整備が強化されたが、今大会が次の時代に引き継ぐレガシーは、持続可能な社会を牽引する経済社会システムの変革になると、確信している。